ジュリエット

ジュリエットは体がひよわい。九カ月で産まれたためかも知れない。親達はこれを心配する。ジュリエットの発育に面白くない点があるとすぐその説明にこのハンディキャップが持ち出される。十カ月に僅か一カ月しか足りなくないだけのこの「九カ月」という言葉は、さながら一つの呪文である。稀にこの家庭を訪れる客などは、この呪文をきいてその意味の深さを少しばかり量り難く思い、曖昧な微笑をもって受け答えをするのである。

産まれたばかりの赤い塊を見て親父は心にたじろぐものを感じる。その小さい赤い顔は怪しいばかりに親父の醜貌（しゅうぼう）の特徴を備えていて、微細な物質以外に何ら提供するところがなかったように気軽でいた親父の心を愕然とさせる。可愛いというのはもっと余裕のある気持ちである。親父はただ愕（おどろ）くばかりである。それのみか自らの存在に対して余り誇りというものを持っていない親父は、このようなまざまざとした遺伝を、些か畏怖（いふ）をもって考えざるを得ないのである。

ジュリエットの出現は家庭の中へ変化をもたらす。第一に親父に感じられるのは、母親の態度の変化である。何よりも一つの手柄をした感じ、その手柄に対してこの報酬を求める心か、或いは家庭の争うべからざる根をここに下して親父をしかと掴まえ得た安堵か、やや横柄になった態度である。親父は意外に思う。

次には、この小さな存在の当然の結果として極まりない騒音の発生である。親父はその余りの激しさに呆れ果て、はては感嘆し、喧（やかま）しいなどと形容するも愚かなこの存在を、自分の所有物と思うのは浅墓（あさはか）な思い上がりであることを次第に悟るのである。親父の定義によると所有物とは所有者に対してこのような困惑を与える筈のものではないのである。

ジュリエットによる特殊な来訪者がある。男女さまざまな保険の勧誘員である。彼等は

様々な名刺を出し自己紹介する。中には特大の名刺に陸軍砲兵大佐という肩書のあるのを出し、親父をして倉皇(そうこう)として鞠躬如(きっきゅうじょ)として玄関にかしこまらせ、用件をきくに及んでカンカンにさせるのである。親父はこれ等を撃退するのに骨を折る。なまなか此方の気持や主義、状態を述べて断る理由としようものなら話は必ずもつれ、より頓(とみ)に彼らの尻が上がらなくなる。親父はこれにこりて嘘を言う。

「もう、××にはいりました。」

すると言下に、

「それは生命保険でしょう。嘘でしょう。」

と真正面から手きびしく反撃されて、親父は思わずたじたじとする。そして結局悟るのは、如何に向うが弁じようと粘ろうとこちらはそれ以上の根気をもって、ただ、

「お断りします。」

を彼らの雄弁の合の手にするのが、最も有効であるということである。これは嬰児がかく親父を世間的にブリングアップするのであるとも考えられ、親父は苦笑するのである。

すが眼の人相のよくない男が立ち現れて親父に一片の紙切れを渡す。

記

一金　五拾　銭　也

「ジュリエット」殿（祭　典　料）

右収納候也

昭和十三年八月二十三日

東京市吉川区王九町四ノ一五七八

太祖天路講大本部

殿

これは何だと訊くと、その男は、子供の胞衣を納めて焼却してお祓いをしたからその金を貰いに来たという。そんなものを頼んだ覚えはないと答えると、胞衣は病院とか産婆さんから皆集めて行って焼いて、あとで面倒がないようにちゃんとお祓いをしたのですから、という。「あとで面倒がないように」と力をいれてくり返す。祟(たた)りとか何とかいう事らしい。親父は母親に訊く。勿論要領を得ない。このすが眼の男の何処の何者なるやも勿論見当はつかない。しかしこれが東京市の極めて文明的なしきたりであるかも知れぬと思い、要領を得ぬままに五拾銭渡してしまう。すが眼の男の出て行ったあとで親父は不審の晴れぬ気持で、じっとこの町会費の受取りのような紙切れを睨む。そして、矢張り謀(はか)られたのではないかと首を振るのである。

近所の独り者の中婆が訪ねて来る。親達が敬遠したいと顔付を露骨にするのにも拘らず赤坊を見せてくれと無遠慮に上り込む。

「まあまあ、お可愛い。いい頬っぺたをして、こんないい赤ちゃんほんとにお楽しみですこと。お羨しい。さあお笑いなさい。ばぶばぶばぶ。××の婆あですよ。覚えて頂戴。ばぶばぶばぶ。まあまあ、このお肌の色艶のいいことったら。いいえね。奥様、お向うの花井さんの赤ちゃん、丁度この方より一ト月前でしたわね。あのお宅じゃおっぱいが出ないんで御座いましょう。だからミルクでね。ええええ大変な費(かか)りでしょうけど、矢っ張りミルクで

すと、こうは行きませんものね。何となく白い浅い色をして、こんな艶々した色には。どうしてもお母さんのおっぱいですわ。それにおっぱいですと、この方のように、何ていい香が。ほんとですわ。妾、この香が大好きですの。こんないい香ったらありませんわ。妾あちらにいました時には孫を預っていましてね。娘が勤めに出るもんですから、妾、赤ちゃんのこの香がよくってね。お昼の御飯などはねえ、赤ちゃんをハンモックに入れて座敷に垂らしておいて、妾そのそばに坐って御飯食べますの、ええもう、お菜なんか要りませんの、その香を嗅ぎながら食べますと……」

親達は眼を大きくしてこの中婆を送り出す。親父は、赤子を見下ろして「あな、うまげ。」と呟く鬼婆の話を思い出す。塩でもまきたい気持である。

子供の育て方については、近所の婆共が色々と口を出す。忠告は親切であると共に恐るべき性質を持っている。恐るべき所以（ゆえん）は忠告であっても半分は命令である。世にある概（おおむ）ねの親切というものがそうであるように、もしこの忠告がそのまま受け容れられなかった時の婆共の非難は、饒舌毒舌入り交えて書斎に日毎に響くほど喧しさを極める。その中で最も大きいのはまるで機械でも扱うように授乳を時間通りにするという非難と、昼間背中に負わないで寝かしておくから夜泣きをするのだという非難である。生後一カ月で授乳の無制限から消化器を悪くしたので、親達はこの婆共の忠告の前者には敢然として反対する。しかし夜泣きには婆共の非難に対抗するだけの策がない。またその非難が婆共自身の迷惑を根拠にしていることが判るので親達は困惑するのである。

ジュリエットは寝付きが悪い。夕方寝る時も夜泣きのあともそうである。ジュリエットは長い間泣き叫んだ挙句（あげく）泣き疲れてきて、次第に泣きじゃくりが弱まりつつ眠るのが癖で

ある。それも起伏のない線で漸次静まるのではない。時には自分のしゃくり上げに驚いて叫び上りながら新しく泣き始めたりする。

思えばこれも遺伝と思われる節がある。結婚して何時頃だったか、未だジュリエットの生まれなかった時分、母親が眠りかけている枕許で、親父は叱言を言ったことがある。すると母親は、

「何よ。何よ―」

と寝呆け眼で食ってかかった。親父はこの時も驚いた。何一つ逆らったことのない若い妻の隠された性質を発見したようなものであった。それ以来父親は母親が眠い時は人柄が変わったようになるのをひそかに注意している。酒がアルコオルによって人の性質を変えるように、眠くなる時の毒素が母親の性格を一変せしめるものらしい。またひそかに思えば、この母親の眠り際の性格がジュリエットに現れて寝付きの悪い点になったのに相違あるまい。考えて見ると遺伝というのも不安なものである。親父の醜貌と母親のつまらぬ性質とが顕著に遺伝するなどは生憎である。嘘か本当か知らないが、嘗てバーナード・ショウのところへアメリカの一映画女優が結婚を申し込んだという話がある。妾の肉体と貴下の頭脳とを持ちよったら素晴らしい子供が生まれるでしょう、というのが女優の言い分であったが、ショウは、そいつはよした方がいいと返事をした。貴女の頭脳と私の肉体とが結びついたら大変だろう、考え物だ、と言ったということである。親父はしばしばこの話を思い出す。単なるショウの皮肉ではなく、これは時に現れる事実である。成程と親父は思う。しかしこんなことを本当に考えていると人がきいたら腹を抱えて笑うに違いない。この話から推して考えれば、親父が自ら恃(たの)むところのものは彼の頭脳である、ということ

になる。そいつは笑い物だ。笑止だ。片腹痛い笑止であると共に悲しい笑止である。

ジュリエットは泣き叫ぶ。親達は息をころしてその泣き静まるのを待つ。傍にソヨともせずにいて新しく燃え上らないようにハラハラする。親達は殆ど祈っている。祈りとは思慮と努力の尽き果てたところから出るもの、その際の持て余した願望のはけ口である。考えようによっては他愛のない姿である。また余りにも策のない情けない姿でもある。泣きじゃくりが低い唸り声になって消えるまで、親達の緊張は解けない。幽(かす)かになり喉の奥で僅かな音を立てている頃になると親父は傍に寝ていて誘われるように眼をつむる。神経の芯が非常に草臥(くたび)れて来ているので、希望が見えると共にぐったりとなるのである。すると不思議に何時もまざまざと瞼に浮かんでくる景色がある。ゆるい坂があり、その坂の左手に柿の木のある石垣があって、暖かい陽が一杯に当たっている。数も少なくなった柿が赤く、葉のない棒のような枝に光っているところからもう秋も過ぎた頃かも知れない。何故この景色が浮かんでくるかさっぱり判らない。親父の故郷にもまた自身方々歩き回った折の記憶にもそんな処は一つもない。見えないところには農家があるらしいが、人は一人もいない。ただ静かに陽が当り、明るく暖かいうちに一抹の悲しみがただよっている。そしてその悲しみに深い懐しさを覚えてこの日向へはいって行く気持ちに、親父は何かしら思い当たるところがあるような気がする。しかしはっきりは判らない。

満一歳。ジュリエットはまだ歩けない。歯も生えない。親達の世間に通用しないハンディキャップ呪文はまだ続く。ジュリエットは口だけは相当に利く。親馬鹿はこれを頭が鋭いと考える。

ジュリエットは牛乳を呑んでしまって、硝子コップとアルマイトの牛乳沸かしとを持って遊ぶ。牛乳沸かしの中へコップを入れる。出して見る。再び入れる。くり返す。今度は牛乳沸かしをコップの中へ入れようとする。牛乳沸かしは底をコップの口に当てて衝突する。屡々(しばしば)試みても小さいコップの中へ入り様がない。再びコップが牛乳沸かしの中へ入れられる。かくして物の大小は論理的に証明される。親父は見ていて感心する。

物の穴に非常な興味を持ち出す。障子の穴、縁側の穴、台所の揚げ板の隙間、母親のエプロンの穴、その穴に近寄り指を入れて見る。それが物の表面にある単なる模様でないことを確める。親父はこれを、それまで盛にやっていた「いないいないバー」と連関させて解釈する。幼児はこれ等により、自らの網膜に映った空間に奥行のあることを次第に確かめるのである、と。勿論、母親に伸ばした手が届かないということも距離感を与える基礎にはなるのだろうが、この穴の穴たる所以(ゆえん)を発見することによって、空間に対する知識が一層高等感覚的に整理されるのではなかろうか、と親父は考える。

また親父は考える。こういう時代の記憶というものがないのは何故だろうか。それは幼児の経験はすべてこのような外界についての概念観念を作るために燃焼してしまって余剰のないためではなかろうか。して見ると記憶として残っているものは余剰の経験の蓄積であるかも知れない、と。

満二歳半、数え年四ツ。

何時の間にか平地を走って歩けるようになる。口は勿論（恐らく）人一倍利く。親父に「御飯でしゅよ」ぐらいは十分に用を足す。恐ろしい音痴のくせに歌の文句だけは正確に

覚える。言葉の世界に敏感であるのが、また親達の親馬鹿を煽る。火鉢の炭を見て「お炭がワッショイしている」などと言って親達を嬉しがらせる。「ワッショイ」というのはお祭の神輿をかつぐ人達の掛け声である。この場合、掛け声と人の群れと人の行動との区別は余りないようである。「一二三四」と十まで数える。之も親達の自慢であるが、本当は数の意味は全然判っていない。ジュリエットは数え年四つ、と自分でも知っている。「ジュリちゃんいくつ」と訊けば、拇指だけを折って前に出しながら「よっちゅ」と答える。それなのにジュリエットは母親に訊ねる。

「ジュリちゃん、三っちゅになったら、何するの」

「ジュリちゃんはねえ。もう三つは行ってしまったのよ、もうあんたは四つでしょう？」

と母親がいう。ジュリエットは不思議な顔をする。そこで親父は単に教え込まれただけの言葉の運転と本当の知識との間のギャップを知って、母親に向って無理に物を教えては不可(いか)んと、命ずるのである。

ジュリエットは鏡台の前に坐る。白粉の瓶の蓋を開けてかき回す。それを無茶苦茶におでこにこする。紅を鼻の頭へつける。櫛で頭を撫でる。有り合わせのボール紙をとって合わせ鏡をする。全く大変である。もっとも鏡台の前に坐るのは今始まったことではない。かつては頬紅の紅い粉を顔に塗らずに誤って当時の習性上口へ搬(はこ)んでしまって、翌日は赤いうんこをしたこともあった。化粧道具という母親のこの遣瀬ない気晴らし道具に対して、ジュリエットは異常な関心を持っている。こうして母親が台所から慌てて手を拭き拭き飛んで来るまで、このメイクアップは続く。これに凝りた母親は抽斗を逆にはめてしまう。白い塗りのない桐の木の抽斗(ひきだし)の尻が出て、ここには手掛けがないのである。

飯を終えて新聞を読んでいる親父のところへジュリエットはやって来る。
「おとんたん。お茶、おあがんなしゃいよ。」
と言う。
「しゃあ（さあ）」
親父が見ると畳の上に何もない。ジュリエットは何もない茶碗に何もないお茶を注いですすめる。何から何まで仕真似である。もっとも、直径一寸二分のかねの盥で立派に顔を洗って見せるジュリエットにして見れば、こんなことはいと容易である。親父も仕方なく、この何もない茶碗を手にとって呑まざるを得ない。
「いやあ、有難う。スーと、ああおいしい。」
ジュリエットはそれからこの何もない茶碗や急須を抱えて立って行く。茶箪笥の縁へ行って、左手でつかまり、右手で空を漕ぐ。
「ガタンコ、ガタンコ。ガタンコ。」
これはポンプである。やがて、
「シュー」
と言ってジュリエットの右手が茶箪笥の縁から斜めに動く。水である。すでにそれは何もない洗い桶に満ち、前の茶碗と急須を洗う動作がはじまる。
ジュリエットのポンプは到るところにある。柱と言わず本棚の縁と言わずピアノの脚と言わず、ジュリエットがそのつもりで近付けばたちまちポンプに早変わりする。右手が動けば水は滝のように流れ出るのである。
ジュリエットは床の間のスタンダード辞典に腰を掛け、前にある小机に絵本を開いて大

声で絵を読む。これを自ら「ジュリちゃんのお勉強」と称する。これは親父の真似である。ジュリエットは上瞼を下して細い眼をし、顎を出し、腰を曲げて足をひきずって歩いて見せる。これは親類の老婆の真似である。親父はこれを見て母親が手を叩く程には応じない。

ジュリエットは陰で何かしている。やがてげえげえ言う小声がするので親父が飛んで行って見ると、ジュリエットは黒い紐で首をしめている。親父は慌ててその紐を放つ。ジュリエットは少し上気した頬とうるんだ眼で親父を見上げながら無心に笑う。勿論この家に首くくりがあったわけではない。「にんじん」にしては早い。しかし親父はこのジュリエットを非常に不安に思い始める。

親父はジュリエットを戸外へ連れ出す。ジュリエットが余り家にいるのがよくないと考えたからである。白い毛のケープを着て毛の帽子を被ったジュリエットは、戸外で眺めると恐ろしく小さい。親父はまた「九カ月」の呪文をとなえて頭を振る。ジュリエットは門の前の段を下りるのさえすくんでしまって、親父の手を求める。親父は数度声を励ませて見るものの矢張り手を貸さざるを得ない。親父はジュリエットの信頼心と自分の教育的意志の弱さとが相互に原因結果になり合っているのを認める。親父は自分の弟妹に対する経験で厭と言うほど感じさせられた自分の教育的手腕の欠如を思い、再び一層重い責任の下にこれをくり返さなければならないことを考えて憂鬱になる。

ジュリエットは道傍の溝に踞(しゃが)む。

「お水が流れてるわ」

溝の底は熱のある病人の舌の奥のような白い沈殿があって、薄く濁った水が勢いよく流れている。澱んでいないだけまだしもであるが、こんな水を驚いて眺めるジュリエットを

親父は可哀そうに思う。あの田舎の深い底のすけて見える綺麗な水が一杯になって、鮠(はや)が走り鮒が隠れ黒い蝦が杭の陰で長い腕を動かしている河は、都会の子供にとっては物語の世界である。

親子は軍用地の原っぱへ出る。こんなものがあるだけでも旧市内より遥かに有難い。一米半ばかりの小丘をジュリエットは親父の掛け声でやっと登り終える。丘の上は芝に似た短い草で覆われている。ところどころに熊笹がある。空は晴れている。北の方に細長い雲が帯をひいたように長くなっている以外に雲はない。風は少しあるけれども寒いほどではない。枯草に当る陽が白く反射する。時々蠅のような蜂が飛んで通る。原っぱ続きの遥かに遠いところで、四五人の子供が模型飛行機を飛ばしている。親父は草の上に腰を下ろし、何か拾いながら歩き回っているジュリエットの姿をじっと眺める。

熊笹の向側から小さい一つの頭が現れる。鼻の少し開いた丸顔の、短いパンツをはいて膝を出したロメオが元気よく上がって来る。素足に黒い緒の小さい下駄をはいている。体の大きさはジュリエットと差幾何(いくばく)もない。遠くからジュリエットを見てよって来るが、近くまで来ないうちにくるりと向きを変えて何処かへ行ってしまう。やがて全然別の方からまた現れて来る。ジュリエットもそちらを見る。ロメオは手に細い竹切れを持っている。ジュリエットの一間ばかり前へ来て立止る。ジュリエットは立止ったままじっとロメオを見守る。好奇の他に少なからざる恐怖があって、親父の方へ逃げ出したいのを辛うじて押えているのが判る。ロメオは鼻の下を手でこすりまた向きを変えて、手に持った棒で枯草を叩きながら丘を下りて行ってしまう。

ジュリエットは親父の方へよって来る。親父の腰を下した傍に無言で添って立つ。親父

は鼻の少し開いたロメオと団栗眼のジュリエットとの釣合いを考える。その案外にいい釣合から見て、我が子の容貌が余り感心したものでないことを始めて知ったようである。親父はこの一二年のうちに、誕生の際の驚きをすっかり忘れていたのである。

三度目に枯草を叩く音が近づいた時、親父は手招きしてやる。ロメオは近付いて来る。ジュリエットと向い合って立つ。何も言わない。ジュリエットも黙っている。親父が助けてやる。

「坊やはいくつ？」

ロメオは拇指を折った右手を勢いよく出す。ジュリエットと同年である。ジュリエットに比べると、口こそ利かないが手脚も丈夫そうで態度もハキハキしている。ジュリエットはいう。

「ジュリちゃんよっちゅよ」

と片手を出す。ロメオは少し笑う。未だ味噌っ歯にならない歯が綺麗で白い。

「坊や、坊やの名は何て言うの？」

ロメオはまた勢いよく拇指を折った右手を出す。この質問は年を訊ねるのと区別がないらしい。ジュリエットは、エプロンの下の赤いセーターを見せる。「紅い紅あいの。綺麗でしょ。ね？」

ロメオはまた少し笑う。ジュリエットは右を向く。ロメオはその左に並んで立つ。

「お靴！」

とジュリエットは自分の他所行きの靴を見下す。ロメオはそれを見た眼を自分の足に移す。そして自分の小さい足の指を鼻緒の下で動かす。ジュリエットは声を立てて笑う。ジ

ュリエットが手に持っていた石を落すとロメオはひろってやる。かくして次第に親密の度が増して来る。ロメオはジュリエットの手に笹の枯葉を見て、笹の叢(くさむら)へ行って葉をとる。ジュリエットも危うい足つきでそっちへ寄って行く。葉を一枚貰う毎にジュリエットは声を立てて笑う。笑う度に笑い声は高くなって動物の叫び声に似て来る。ロメオも何か言う。二つの小さな姿は一心になって笹を分ける。共通した仕事を発見しそれをする喜び。二人は辺りを忘れて没頭する。親父はそこに人間の最も簡単で普遍的な方程式を見、親父自身の責任の安易な終点を見る。

原っぱの傍に洋館がある。その開いた入口から癇高い鋭い女の声がする。

「ロメオ！ロメオ！」

ロメオは叢から顔を上げる。ジュリエットの顔を見る。ロメオはそろそろ斜め後向きになって丘を下りる。玄関の戸口から顎と口の尖った痩せて眼鏡をかけた四十位の女が顔を出す。服装は、アッパッパの上位に位するものからの対になるべき冬服である。色は茶色である。

「ロメオ！」

ロメオは急がない。ゆっくりと玄関へ近寄る。女はジュリエットとその親父の方をチラと見ながら、ロメオの肱を捕える。ロメオは何か言う。そして高く言う。

「駄目ですよ！」

女はロメオを玄関に押し入れながら、再び丘の上の親子をチラと見る。ジュリエットの親父は立上っている。親父は女の視線から何物かを受けとって、自分のジャンバーに下駄履きの姿を顧(かえり)みる。このようなことは、親父の日頃の信条からすれば屁とも思わない筈の

ものであるが、この時妙に愉快でない。ジュリエットも傍に来て立つ。

暫くすると一時静かになっていた玄関でロメオらしいガタガタさせる音が高くする。半開きになったドアーからロメオが三輪車を出そうとしている。このロメオの努力がジュリエットと関係のあるものかないものか定かでない。しかし親娘は三輪車が原っぱに現れるのを期待して、じっとそちらを眺めている。再び癇高い声がする。玄関で女の叱るらしい声。奥へ引き込まれた三輪車のぶつかる音。ロメオの泣く声。

玄関ドアーはぴったりと閉まる。戸の閉まって静かになった玄関は無情に白く冷たい。親娘にはもう期待すべき何物もないことが判る。親父はポケットに手をつっこみ、憮然として下唇を反らす。ジュリエットは親父を見上げる。その眼は失望と共に物問いたげなそして訴えるようなものを含んでいて、もう子供の眼とばかりは言えない。親父はこの眼を平気では受けられないで思わず避けるように顔を傍に向ける。そんな眼付きをするなと言いたい気持ちである。俄かに風が寒くなったように感じて、親父はジュリエットの手を引いて丘を下りる。帰る途々（みちみち）親父はまた、ジュリエットはかくして成長する、などと考えたりするのである。

【新風土第三十五号　（小山書店）昭和十五年】

47頁　倉皇……あわてふためく
47頁　鞠躬如……おそれ慎んで、身をかがめて、
47頁　ブリングアップ……育てられる
55頁　「にんじん」……ルナールの小説、戯曲。